

外来魚駆除と水産資源の今後の課題 滋賀県農政水産部水産課 上垣雅史

○外来魚駆除量と生息量

琵琶湖における主な外来魚駆除は、1985年から滋賀県漁業協同組合連合会が主体となって国や県の補助を受けて行われている。外来魚の駆除量は15年程前には毎年400トン以上であったが、現在では75トン前後である。これらの駆除データから水産試験場が毎年推定している琵琶湖での外来魚生息量は2023年4月現在で370トンとなり、2006年の約2,400トンの15%にまで減少した。

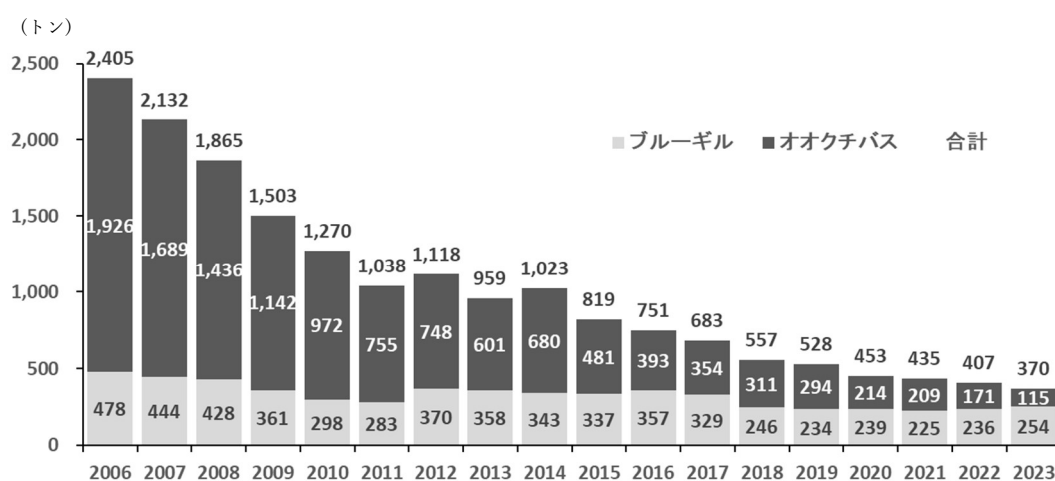


図. 外来魚推定生息量の推移

○直近の目標と課題

県での事業名「有害外来魚ゼロ作戦事業」が示すように、あくまで琵琶湖における外来魚はゼロを目指すものであるが、直近の目標としては2026年4月現在で生息量300トンまで減少させることを目指すものとして2021年10月策定の滋賀県農業・水産業基本計画に示した。この目標値は、琵琶湖での漁業被害が一定抑制でき、在来魚が増加し得る密度として設定した数値であり、現在、この目標を達成し得る段階に入っている状況である。

当然、生息量が減少すれば、捕獲しにくくなる。加えて、近年の漁業者数の減少も拍車をかけ、これまでになく駆除が進みにくい状況となっている。これまでの知見を活かし、時期や場所、漁法をいかに工夫して効率化を図るかが課題である。

○水産資源と新たな局面

現在、春の南湖ではホンモロコの産卵が随所で見られ、特に集中的に外来魚を駆除している水域ではニゴロブナの再生産もこれまでになく確認される等、明らかな変化が見られる。一方で、近年、気候変動をはじめ、琵琶湖の漁場環境の変化に起因すると考えられる水産資源の低迷や不安定化が顕著である。このような漁場生産力の低下に対してどのような対応ができるか、琵琶湖の水産業にとって大きな局面を迎えている。